

さんしゃ Zapping

Vol. 30 No. 4 (通巻 180 号)

2016 年 3 月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186

E-mail: s-kyoken@st.ritsumeikan.ac.jp

<http://www.ritsumeikan.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

＜ご退職挨拶＞

定年退職にあたって

—素晴らしい学部での思い出・新たな協同を—

國廣 敏文

p. 2

退職を迎えるにあたって—「国際インス」の思い出— 深澤 敦

p. 4

＜学部創設 50 周年記念＞

産社創立 50 周年の今年、うれしいこと二つ

須田 稔

p. 6

産業社会学部創設 50 周年記念式典・記念イベントは
大成功をおさめました！

佐藤 春吉

p. 12

〈ご退職挨拶〉

定年退職にあたって

—素晴らしい学部での思い出・新たな協同を—

國廣 敏文

早いもので気がつけば 26 年経過し、はや定年！「光陰矢の如し」と言いますが、まさにその通りで、自分でも驚いています。学部みなさんには色々とお世話になり本当にありがとうございました。

退職に際して研究室を片付けておりましたら、過去の色んな書類や文書が出てきて、それらを見ながら、着任した頃のことやその後の出来事を思い出しています。今年は産業社会学部創設 50 周年。私は学部の歴史の半分をここで過ごしたことになります。定年に至るまで間、色々ありましたが、基本的には楽しい思い出しか浮かびません。人間の脳というのは、嫌なことや辛いこと悲しいことは忘れよう(忘れたい)と機能するのでしょいか(笑)。

私は、「現代政治論」を担当しておられた故・小林幸男先生の後任教員として 1990 年4月に着任しました。当時の専任教員は

47 名。初めて出席した教授会では、大学の今後の方向性を決める長期計画についての議論が熱く戦わされ、時には夜の 8 時・9 時まで議論が続くこともあり、その時は、近所のうどん屋さんから素うどんを取り、それを啜りながらまじめな議論をする姿に感心すらやら可笑しくなるやら。

また、着任時の学部長であった芝田徳三先生のお人柄やお姿が私の亡き父に似ており、とても親近感と安心感を抱いたのを今でも覚えています。とにかく、“熱い”産業社会学部の一員となった喜びを今でも忘れません。

その頃は、「現総共」(現代化・総合化・共同化)というキーワードが語られており、文字通り産業社会学部でもそうした“雰囲気”が漂っていたような気がします。当時、事務室は学而館、学部共同研究室は修学館の端にあり、テーブルを囲んで多くの教員が

お茶やコーヒーカップを片手に、ベテランの先生から若手まで、最近の学問動向や学内状況等についてフランクに語り合っているような「サロン」的雰囲気がありました。浪人生活の長かった私には、嬉しくて楽しくて、アットホームな雰囲気に「本当に素晴らしい雰囲気の学部で就職できたなあ」と喜んだものです。着任すると、同じコース(当時は産業・社会コース所属)の先生方が歓迎会兼研究会を開いてくださり、秋の神護寺で歓迎会を兼ねた研究会を開いていただきました。その後、八瀬の窯風呂や雄琴のスパに「研究会」を名目に出かけては、日頃の疲れを癒したり、学部のこと大学のこと、家族のことや趣味のことなど色々とお話をして親しくお付き合いをさせていただきました。

また、着任2年目に荒木穂積先生と組合の職場委員になるとともに、「若手懇談会」を作って学部長選挙に若手教員による声明文を読み上げたりして「変化」をもたらすべく、大いに暴れました。先輩の先生からは、「國廣はもう10年前からこの学部で居みたいだなあ」と言われたこともありましたが(笑)。産業社会学部は、学際学部なので皆「一国一城の主」です。上下の気兼ねない自由な雰囲気があったからこそ、そうしたことができたのだと思います。

お酒好きの先生も多く、教授会が終わると「たまり場」的飲み屋に流れて、学部改革

の議論の続きをよくやりました。教員同士とでも“近い”学部であったと思います。

ここ暫くは役職の関係で、学部のみならずとゆっくりお話しできていないので、見当はずれかもしれませんが、学部の教員数もかつての倍近くになり、学部の“強味”は今どうなんだろうと気になっています。それぞれの先生がどんな問題意識や背景を持ち、どんな研究や教育をしているのかお互いに知っているのだろうか。「学際的な総合性」を発揮できる学部としてのメリットを活かし、共同研究や専攻を超えた学びは盛んなのだろうか。。。50周年を機に、現代社会の直面している諸問題を専攻の枠を超えて研究し、成果として世に問うてみたかどうか。今日の日本では、グローバル化とIT化の波に晒される中で少子高齢化が急速に進み、50年前以上に複雑で困難な諸課題に我々や学生たちは直面しています。学際性と総合性と現代性を、学部の構成員みんなの協同によって最大限発揮する。その意味で、時代はまさに“産社の時代”。そして産業社会学部が社会的にも学問的にもその存在価値を試される時だと感じています。私もあと何年元気でいられるか見当もつきませんが、立命館大学と産業社会学部を愛する人間の一人として、この真価が発揮されることを祈念するとともに、注視していきたいと思います。

退職を迎えるにあたって―「国際インス」の思い出―

深澤 敦

国際関係学部が西園寺記念館から衣笠キャンパスに移転することを契機に衣笠 5 学部を横断して設立された国際インスティテュート(以下、国際インスないしインスと略記)は、2000 年度に最初のインス生 215 名を迎え入れてから 2010 年度までに総計 4,178 名の入学者を擁しました。そして、2011 年度をもって入試を通じたインス生の募集は停止されたにしても、この教育実践を通じて衣笠教学の国際化にとって貴重な「遺産」が残されたと考えられます。とりわけ、2004 年度に文科省の現代 GP (Good Practice: 現代的教育ニーズ取組み支援プログラム) に応募し採択された JWP (Japan and World Perspectives Program) の開始によって、国際インスは「立命館大学ではまだどの学部も持ち合わせていない高度な教学プログラムを有する教学機関へと一気にレベルアップした」(総括文書「国際インスティテュート 10 年間の歩み」、8 頁)と高く評価されています。

さて私は、この国際インスを開設するための準備作業に 1999 年 4 月から参加し(同年 5 月 12 日に最初の「国際インス教学準備委員会」開催)、とりわけインスの三つの

プログラムの一つを構成し、産社と文学部のインス生を対象とした「国際社会プログラム」の策定作業に従事しました(他の二つは法学部の「国際法務」と国際関係学部・政策科学部・法学部の「国際公務」の各プログラム)。こうして、同年 10 月 18 日には第一回「国際インス教学委員会」が、同 11 月 8 日に第一回「国際インス運営委員会」が開催され、ほぼ毎週、また場合によっては週何回もインス開設のための諸会議に欠かさず参加したことが今では懐かしく思い出されます。しかも、このインス開設の責任者を務められたのが現総長・学長の吉田美喜夫先生であり、ユーモアに富んだ先生とともにこの仕事ができただことは私にとっては誠に尊い経験となりました。

そして、2000 年 4 月にインス一期生が入学するとともに、私は最初の国際インス主事となり(2001 年 3 月まで)、同年 6 月 21 日にはフランスの作家ポール・ニザンの孫であるエマニュエル・トッドを迎えて国際インス開設記念講演会を開催することができましたし、その後も 2006 年 3 月に至るまでインスの教学委員を務めさせて頂きました(その間に、産社の 2005 年度カリキュラム改革に

あわせて、人間福祉学科にインスの 4 番目のプログラムである「国際福祉プログラム」が新設)。また何よりも嬉しかったのは「開設以来、入試出願状況は定員の 10~15 倍に達し、多くの学部で国際インスティテュート生の入学枠が、通常の学生よりも人気および入試偏差値が高い状況になっていた」(前掲総括文書、5 頁)ことです。

さらに他方で、産社における担当科目としても、当初はインス生のみから構成された 2 つの基礎演習クラスの 1 つを私が受け持ち、1 回生の 12 月頃に開催された 5 学部インス生の「ゼミナール大会」でも産社の基礎演クラスが他学部にも勝るとも劣らない評価を獲得し、彼・彼女らの積極性や優秀さに大いに鼓舞されたものでした。また、国際社会プログラムの 2 回生を対象とした登録必修科目である「国際社会フォーラム」の 1 クラス(移民問題)を何年にも渡って担当し、演習形式のこの授業には産社のみならず文学部のインス生も参加しており、後にその文学部のインス生 1 名の卒論さえも指導し、イギリス・リーズ大学の修士課程への進学を支援できたことが思い出されます。これは(特に国際機関などへの就職希望者に対して)インスの教学と大学院進学とを結びつける必要があると考えていた私にとって(その制度化はできなかったにしても)、細やかな一つの成果をなしています。

また、国際インスの 4 つの教学理念の 1

として「留学と教学の統合」(他の 3 つは「専門教育+国際教育」「学部横断教育」「留学生との協働教育」)が最初から掲げられており、海外研修先の確保に私も参加しました。フランスに研修・留学先を見出せなかったのは残念でしたが、イギリスのウェールズ・ポワイズ (Powys) 州 マッカンレス (Machynlleth) 町の郊外にある CAT (Center for Alternative Technology) という環境問題を学び、エコロジーな生活を実践するテーマパーク的なセンターは 2 度も訪問しました。最初はインス生を受入れてもらう準備のために 2000 年 8 月に、二回目は翌年 8 月に最初のインス生 13 名(中には私の基礎演の学生も数名いたと記憶しています)を引率して行ったのですが、このセンターは少し高台にあったスレート採石場の跡に作られていました。そして、そこに入るのに省エネのため電気を使わず(雨水の貯水池から出る)水の重さだけで動く水力ケーブル車で 180 フィート(60 メートル)の斜面を登っていく仕組みなどにはさすが環境問題のテーマパークだと感動したものです。

最後に産社における私の主要講義科目であった社会政策論に関してですが、実は国際インスとの合併開講とするためもあって 2002 年度から「国際社会政策論」に変更いたしました。そして、これは歴史家としての私のその後の研究に対しても大きなインパクトを与えています。つまり、この講義を準

備する中で、たえず国際社会政策の主要な主体である ILO の創設の歴史的背景について研究していくことになったからです。このために ILO 創設に最も貢献したと考えられるフランスの史料を読みながら講義したこともあって、私の国際社会政策論は少し難しすぎるという評判が流布していたようで

す。しかし、この研究の蓄積があったからこそ、昨年刊行された産社創設 50 周年記念学術叢書の 1 つに「国際社会政策の誕生とフランス労働総同盟」という論文を発表することができました。今後は、この論文を基礎として、より体系的な国際社会政策形成史をまとめたいと考えています。

〈学部創設 50 周年記念〉

産社創立 50 周年の今年、うれしいこと二つ

名誉教授 須田 稔

中野清一先生と奥田修三先生の人間像を称揚する書物が、それぞれ、若い歴史教育者と大学院生によって公刊されたのである。

中野清一先生のごことは、平井美津子著『原爆孤児』(新日本出版社。2015. 7.20)。奥田修三先生については、高田雅士・一橋大学大学院社会学研究科修士論文「1950年代前半期における地域文化運動の展開徒人びと——国民的歴史学運動再考」(2016.1.18 提出)。

~~~~~  
僕がこの二冊とどういう関わりがあったか、を明らかにしておこう。

前者は、歴史教育者協議会の会員で、すでに数冊の書物を刊行してきた、立命館宇治中学・高等学校教諭本庄豊氏が、歴教協仲間の人が中野清一先生の立命館大学での活動のことを知りたい、資料をお持ちなら貸してあげてほしいと、電話があり、いまにして思うと、『産社論集』の創刊号からご退職までの先生の論考を探すべきだったと悔やむのだが、奥田修三・須田・林堅太郎が編集委員で制作した『学部づくりの 20 年』に収録の短い文章があるからと、彼女にお会いした折にお貸したのであった。

もう一つ、1 期～4 期生の産社OB・OG有志の会(毎年、殆ど京都市内で懇親会をも

ち、僕も教員でただ一人参加しているのだが、自治会・学会の役員だった人が大部分を占める)の場で、中野ゼミだった人を思い出してもらい、いま日本ユーラシア協会京都府連合会理事の馬場浩君に、思い出を書いて貰うことができた、という経過もある。

平井美津子さんは、「あとがき」で、須田・馬場の名前も記して下さっている。加えてうれしいことに、「私が夢中になって山口勇子さんのことを話しているのを聞き、本にしようと提案してくださった神戸女学院大学教授の石川康宏さんの働きかけがなければこの本が出版されることはなかった」とお書きなのだが、この石川康宏氏、去年の京都民主府政の会・民主市政の会の新春のつどいで、閉会后、扉前で僕を待っていたらしく、「須田先生ですね。河上洋子さんに教えられて、ご挨拶をと。実は僕、先生の授業には殆ど出なかったのですが、自治会活動で。アメリカ黒人の問題を話しされたので印象深かったのです」と。去年はその後、宇治の革新懇主催の学習会で、次に大阪での「政治革新を考える」フォーラムで会い、神戸のNHKを考えるつどいで宝田明氏の講演の前に「戦争法」を斬る講演を最前列で拝聴した、など彼の明快で鋭い迫力ある能弁に感服する機会を多く持った、という幸運にも恵まれたのだった。

本題に戻るが、平井美津子氏が参考文献に挙げる 17 冊の中に、中野清一教授記念

事業会『仲間とともに——中野清一教授広島大学御退官記念論集』(1965)と、中野清一『広島・原爆災害の爪痕』(蒼林社出版。1982 年)の2冊がある。索引に立命館大学や産社学部に関係する人名も事項もない。しかし、論文が産社共同研究室の書庫に収蔵されているのかどうか。あれば、繙くだけでも先生の遺徳を偲べるだろう。まずは調べよう。

平井美津子氏の本から抜き書きすると、中野清一先生は 1905 年、小樽市色内町に生まれ、小樽商業から小樽高商へ進み、1923 年ころ小林多喜二と出会う。「簿記やソロバンばかり勉強するのが能じゃない。たまには文学や劇の勉強もした方が良い」と勧められ、近代演劇研究会に入り、多喜二の主宰する読書会にも顔を出すようになる。当時、社会学研究会もあれば哲学研究会もあった。中野は弁論部に入り、大山郁夫の講演会の主催に奔走した。1925 年のことである。多喜二はすでに北海道拓殖銀行に勤めていた。

中野は『緑丘』(小樽商科大学同窓会誌四二号、1964 年 12 月1日)に「多喜二さんの執念」という一文(割愛する)を寄稿している。…中野は後年、「社会学に進んだのは多喜二さんのおかげだ」と語っている。九州帝大ではカントの「永遠平和論」に没頭、1930 年の小樽高商の教授、…1939 年、満

州の建国大学助教授、1943 年東京の民俗学研究所に移籍、休暇で岩国の家族のもとに帰った中野は 8 月 6 日を迎えた。8 月 24 日、2 時間ほど、広島駅付近をうろついて列車を待った、その時のことを書いている。〔割愛〕戦後、横浜国立大学に籍を置いたが、1949 年 8 月に広島大学に赴任、原爆被害の実態を社会学的に調査したいと考えた。広島家庭裁判所から少年事件について社会学の立場からの鑑定を依頼された。1952 年、20 歳の青年 U 君との出会いが研究者としての中野を変えていく。中野は平和運動について「あゆみ」に綴っている。〔割愛〕。

1965 年 4 月、立命館大学産業社会学部の設立で教授就任を請われて、中野先生は 1931 年に結婚なさった千歳夫人とともに宇治の木幡に居を移された。ゼミ生馬場浩君の回想記がある。

中野清一先生は 1993 年 7 月 2 日に享年 88 歳で、千歳夫人は 2005 年 2 月 25 日に享年 98 歳で生涯を終えられた。お二人のお墓は、宇治の黄檗霊園にある。

もう 2 年も前になるか、『毎日新聞』に平和運動史を連載なさる広岩近広記者の記事で、広島大学時代の教え子の原義明氏が宇治市内にお住まいだと知り、電話して、霊園まで案内して戴き、先生ご夫妻の墓前にぬかずいたのであった。御存命中にお訪ねしておけば、多喜二のこと、原爆孤児のこと、平和運動のことなど、一杯お聴きできた

のにと歯ざしりする。どこか僕の父と風貌が似ていたから、親近感ももっていたのだが、現職時代の多忙に加え、異分野の研究者で接点がないとの思い込みもあって、否、なによりも高踏的な、聖人的オーラを発する正真正銘の学究という印象があつて、近寄りがたさを感じていたからだ。平井美津子氏の『原爆孤児「しあわせのうた」が聞える』を読んで、もう一度、お墓詣りをしたくなるのだ。

-----

高田雅士「1950 年代前半期における地域文化運動の展開と人びと——国民的歴史学運動再考——」が描出する奥田修三先生

3 章と終章で構成される本論文で、第一章は、「奥田修三宅に所蔵されていた民科各地方支部の機関誌などを活用し、地方における国民的歴史学運動の多様性、及びそこでの人びとの営為に注目する。特に、運動に参加した女性たちの姿に焦点を当てたい。」と記述される。そして、「第二章では、民科奈良支部を指導した奥田修三を対象として、地方における国民的歴史学運動指導者の実情を探っていく。ここでは奥田修三を通して、民科地方中小支部が国民的歴史学運動の中ではたした役割を全体のなかに位置づけることを課題とする。」とある。

第二章の「はじめに」に、貴重な記述があ



る。長いが引用しよう。「奥田は、多くの論考が『歴史評論』誌上に掲載されただけでなく、「母の歴史」ブームの火付け役でもあった。しかし、従来の研究史上では、充分に奥田の評価はされておらず、忘れられた存在であるといえる。本論でも詳しく触れるが、彼は国民的歴史学運動終焉後、サークル活動に注目し、「大衆の側」から運動を評価した。このことは、精算主義的な総括が主流であった当時において、まさに異例であり、異例であったが故にこれまで黙殺されてきたといえる。また、『『母の歴史』を書こうを「ふるかわおさむ」名義で発表した事も相まって、奥田修三という統一された人物像が形成されず、これまで掘り上げられることがなかったのだと考えられる。

そして、民科時代の奥田については、深井純一による詳細な研究がある。国民的歴史学運動に関する奥田の論考を手がかりに、「民科運動の成果と教訓を批判的に検討」している深井は、職場の同僚である奥田に対して、時に寄り添い、そして時に厳しく批判を加えており、筆者自身も学ばされることが多い。しかし、深井の研究は、国民的歴史学運動全体のなかで奥田がどう位置付けられるのかという視点については残念ながら乏しい。本章では、深井が取り扱っていない奥田の戦中・戦後体験にも言及し、さらに民科時代については、奥田の動向に留まらず、より広い視野で論じることを課題

としたい。奥田の論考から彼の人と学問を論じた深井とは異なり、本章では奥田を中心とする民科奈良支部の取り組みを国民的歴史学運動全体のなかで位置付けることを目的としている。

第二章の第一節で、奥田先生の戦争体験が記述される。僕も知らずにいたことが多い。

1939 年、旧制東京高等師範学校文科第四部(地理歴史専攻)に入学。1942 年 4 月、旧制東京文理科大学史学科専攻に進学。1944 年 4 月、3 回生在学中に召集され、陸軍航空兵部隊に編入される。1945 年 10 月復員。学生時代の日記と軍隊時代の日記を資料として、「戦時期青年の精神構造」という論文を『立命館産業社会論集』44 号(1985 年 6 月)に発表。また、古川修という名で「敗戦一年の日、ある復員学徒兵の日記」を京都の民主運動史を語る会の機関紙『療原』101 号、1995 年 8 月、に執筆。

高田論文の叙述によると、奥田先生の長兄は治安維持法により 2 度検挙・投獄されたマルクス主義者であった。その影響で、先生は少年期からマルクス主義関係の本を読んでいた。1940 年 8 月 21 日の日記には「天皇は封建制度の遺物」、「八紘一宇とは天皇の侵略主義・帝国主義にほかならないと認識、現実を科学的に認識しようとする姿勢がみられた。しかし、11 月 10 日の日記で

は、紀元二千六百年行事を時代の流れとして肯定、41 年 4 月 19 日の日記では、支那事変の意図自体は悪くなかったとの理解を示していた。1942 年 12 月に行われた天皇の伊勢神宮御参拝について、「今朝この記事を拝読して、何か熱きものが胸にこみあげてくるのを禁じえなかった」と書き、天皇観の変化を見せていた。12 月 15 日の日記で、「すべての個人的自由主義的残滓を払拭し…なければならぬ」、1943 年 1 月 18 日の日記で「国民生活が漸次圧迫されていくのはいい気持ちではない。…しかしじつと堪えしので最後の勝利まで勝ち抜かねばならぬ」と、批判的社会認識はかなり失われていた。6 月 21 日になると、「国家の要請に幾分でもそへれば満足だ。将来がどうの、そんなこと考える必要はない」と書き、兵役志願書を提出して、馬鹿なことをしたと後悔したり、揺れ動いた。8 月 13 日には、体重不足で不合格になって、生き返った気持ちを書く。

1944 年 4 月、学徒出陣で入隊、10 月から半年間、幹部候補生として仙台陸軍飛行学校で高射機関砲の訓練を受けた。45 年 3 月、卒業後、福岡の第六航空軍司令部に赴任。3 月 27 日の日記で、「本当ニコノ国土平和ノタメニハ死スル喜ビヲ感ジタ。…軍人精神ノ未ダ体得サレテイナイ自分ガ悲シイ」と、聖戦のために生命を投げうつ覚悟の弱さを責める。「殉国型」の思考に没入し

ていた自分を、奥田先生は後年、「無知」であり「哀れ」であったと回顧しておられる。天皇制軍国主義教育はすべての実直な青少年を「尽忠報国」の戦死を賛美する狂気で翻弄したのだ。

1945 年 10 月に復員した奥田修三青年。「こゝまで高められた武士道的精神を、我々は今一挙にして喪失しなければならぬとしたら、国民の気風をこのように剛健たらしめたものを、何によって支えるべきか」という不安は復員するまでの 1 ヶ月間続いたという。

連合国軍GHQの日本軍国主義体制解体政策が進むにつれて、奥田青年の思想は急速に左翼化した。

「誠実に」「ひたむきに」戦時下を生きた奥田青年は、この国と自分自身の過去を問いただし、これからの生き方と国のありようについても誠実に思索した。1946 年 4 月 10 日に実施された新選挙法による第 22 回衆議院総選挙で、彼は共産党候補者に投票した。自由 140、進歩 94、社会 92、協同 14、共産 5、諸派 38、無所属 81、という結果だった。マルクス主義と日本共産党が奥田青年に戦後の指針を与えたのだ。「おくれた人民の啓蒙と組織」を「忍耐強く」行うために、彼は地域文化運動の実践へと向かった。

奈良での活動の端緒は、民科京都支部の山内年彦氏から奈良で講演会を開催するよう「命じられた」ことのようなだ。1946 年 9 月～10 月、準備の実務も講演会も無事終了。

47 年 1 月 23 日に、あやめ池文化クラブでの文化運動についての協議会に出席、ここで奈良民主主義文化協会の設立方針を決定、6 月 15 日に発足。

8 月 1 日からの語学講座開催に向けての準備実務を一人でやりきった。奥田青年は、この文化協会の書記局長を委されるようになった。

12 月に、文化協会拡大委員会は民科の結成を決めた。そして、民科を含む専門家団体と各分野の大衆的文化サークルの協議会とで民主主義文化連盟(略称・文連)を設立、文化会議で全体の活動を進める、という構想が固まったが、以後の経過は不詳だ。民科奈良支部は文化協会が発展的解消する形で結成された。

1950 年初め頃までは「そうとう多彩な活動をしたのだが」、1949 年 7 月 4 日、マッカーサーの「日本は共産主義進出の防壁」という言明、50 年 6 月 25 日の朝鮮戦争勃発の前後のレッドパージ、という状況で、奥田青年もパージされ、奈良学芸大学を追放された。

しかし、1952 年あたりから、奈良学芸大学の学生が民科奈良支部に加入し始めた。マルクスの「資本制生産に先行する諸形態」の勉強会の講師として奥田先生は推挙され、奥田先生夫妻は学生たちを厚遇し、食事をふるまったり、エスペラントを教えるなどなされたという。

奈良県は米軍基地の設置、吉野川・十津川流域総合開発の名での電源開発の強行という問題を抱えていた。民科奈良支部はこれら問題への取り組みを迫られた。成果もあったが蹉跌もあり、農民と農村をどう見るかという点で、半封建性が今なお支配的であるという見方や、歴史上の一揆の事実を掘り起こして津風呂ダム反対を闘う龍門の人びとに勇気を与え、その革命的伝統を呼び覚ますという奥田先生の戦略には批判もあったという。

1954 年 6 月の『奈良の歴史教育』に発表した論考で奥田先生は、「民衆」の歴史意識には、「生活体験の中で掴んだ素朴ながら正しい歴史意識」と「過去の天皇制歴史教育で上から注入された「官製歴史意識」が混合し矛盾して存在している。今後の歴史教育はこの両者のギャップをどう埋めるかが課題だ」とお書きになった。具体的には、歴史を書く、「母の歴史を書こう」という呼びかけになったのである。

以後も、波乱万丈は、思想形成の上でも生業の上でも続いた。1954 年、35 歳の先生は、立命館大学人文科学研究所所員に赴任後も、研究者として、教職員組合運動家として、志操堅固に、誠意と熱情で、敬愛された。

1967 年前半、部落解放同盟京都府連一僕は民主主義団体と思っていたが、学部・大学への攻撃の終息期にやっと、それが仮

面にすぎないと認識した一から、差別キャンペーンの元凶と名指しされ、糾弾集会に教授会が向き合ったとき、奥田先生が学部主事(僕が補導主事)として災難を乗り切る大

黒柱であった。

奥田・深井両氏の論文が収録された『産社論集』を、共同研究室が2月10日に恵送してくれた。感謝。

## 産業社会学部創設 50 周年記念式典・記念イベントは 大成功をおさめました！

佐藤 春吉

まず初めに、校友の皆様、学生、教職員の皆様、企画運営にご協力いただいたすべての皆様に心よりお礼申し上げます。

12月5日(土)、6日(日)、2日間にわたって開催された産業社会学部創設 50 周年記念の諸行事は、両日ともに大成功のもとに無事終了いたしました。同記念事業委員会を代表して参加された卒業生の皆様はじめ、本企画を進め支えてくださった事務局スタッフ、学生、校友、教職員など関係者の皆様に深くお礼申し上げます。特に産社校友会の多大なご支援に感謝いたします。

初日の記念式典には、600 名余の方々が参加され、産社らしく格式張らず、華やかかつ盛大な式典となりました。当日は、学生によるゼミナール大会、キャリア企画が取り组まれました。各種の展示や西側広場特設ステージでのさまざまなパフォーマンス、出

店ブース企画などが多彩に取り组まれ、総数で 1000 名をはるかに超える多くの方々が集い、楽しみ、また懐かしの出合いを喜ぶ合うことができました。

二日目は、倉木麻衣さんのトークイベントに 600 名を超える方々が参加されました。当日も各種出店、展示企画の他、産社の学びを考えるワークショップや大学院OG・OBと現役院生ならびに教員の参加した共同研究会など「まじめな企画」にも多くの参加者があり、二日目も大成功でした。「恋するパラダイスさんしゃ」などのユニークな企画、女性のための「産社サロン・クリスマスパーティ」など女性のパワーが発揮された楽しい企画も大成功でした。最後は、産社 50 歳を祝う大フィナーレ、抽選会の後、「グレーター立命」を合唱し、締めくくりました。

この期間、多くのクラスで同窓会が開催され、夜はまた京都市内各所で懐かしい再会と歓談の時がもたれました。二日間の企画を成功させた産社の底力を実感できたように思います。この取り組みを通じて、産社の50年の歩みが作り上げた伝統と成果のすばらしさを皆で確かめ合うことができたと思います。この取り組みの成果のうえにたって、60周年、70周年、さらには100周年を展望しつつ、産業社会学部はさらなる発展を目指して鋭意努力し続けます。今後とも、産業社会学部への変わらぬご支援をお願いいたします。

## Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は [s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp](mailto:s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp) に送付していただきますようよろしくお願いします。



※「校友さんしゃ」臨時号より、画像抜粋